

本の紹介

菊地ふじの監修 土屋とく編

『倉橋惣三「保育法」講義録』を読み終えて

自発・遊び・子ども——時宜を得た刊行——

角尾 和子

本書の刊行は時宜を得ていると思う。それは一昨年来「幼稚園教育の在り方」が説かれ、その後「改訂、幼稚園教育要領」の告示前後の説明に倉橋惣三

の名や、その理論を見聞することが多かった。それもその筈本書下段の校注のところに、倉橋の講演録・著作を通覧・熟読した編者が、「平成元年改訂の幼稚園教育要領」と関連が深い箇所（関）と記したところが二十余箇所におよんでいる。その校注を上段の本文と照らして読むと、倉橋の言葉そのもの

ではないが、倉橋の説き下す保育に対して、幼児に對しての熱い思いに支えられていることがヒシと感じられる。

なかでも、講義録本文（以下「ノート」）の「幼稚園の楽しさは、子どもの自発に引きずられていく楽しさである。」と書かれた前後に「幼児の生活の特色、最も重要なもの、二つ。一、自発的・二、具體的」とあげ「幼児の自発的なる点を少しでも欠いてはこれこそ原理的な誤り」「育ててやるべき自発

は、他発他動の反対」「子ども自身の中より生活の力が出、そして自ら動いている」自発力は「生命的なのである」「自発はいささかも損なわれるべきでないし、また育てるようになってはならぬ」とつづき、同じ著者の他の著書による以上に、「自分が(私) 今日このようにしているのも、楽しく子どもが自発に引きずられているから」と共感する。

「遊び」とは何かと構えると、これを定義づけることはかなり難しいものである。然し、改訂幼稚園教育要領には「幼児の自発的な活動としての遊び」とまことに端的に遊びを定義づけている。このように「自発的な活動としての」といっている根源には、説ききたり説きかえしまだ説き進む「自発的な幼児の生活」への倉橋の信仰にも似た幼児への思いが反映しているように思えてならない。「遊びを通して総合的に指導する」改訂幼稚園教育要領は、「これまでに実践して来た保育とは風向きが違う、これでよいのか」ととらえている発言を聞くことも

ある。又保育現場は混乱しているとの批評もある。遊びを通して保育することが、もしも、風向きが変わるのであるならば風向きは変わるがよい。その事のために、この「ノート」が多くの人々の保育研究に役立てられることを願うものである。

編者の思い 私の願い

編者の土屋さんは同じ保育科の学生を指導する同僚であり、学生の事保育の事をあれこれ話し合うよき仲間である。土屋さんから夏の便りで「今日も、ワープロでシコシコと講義録の文字おこしをしています」と、ふた夏もらったことを思い出す。読み終えて「ああ、これは学生たちに〈倉橋理論の入り口を〉、〈講義のノートをとった人、それをまた写し直した人の熱意と努力のあとを〉知らせたい、その思いで綴られている」と、ご努力を学生にかわって感謝している。多くの若い人々の、保育研究に役立てられることであろうと思う。



あるだけで、全体については「TV」でみたという時代である。このような状況からは若い人は「講義録」の本文に直接は入りにくいかもしれない。そこで編者の解説から読み始めることを薦めたい。倉橋の著作に通暁した上での編者の「ノート」の解説は、この本の全体を覆い、更にその他の著書へ導くものになるであろう。

この本の構成

この本の全体構成は、成立の事情によるものであるがよく考えられている。

1 「ノート」の実物写真

2 「ノート」の成立の事情と、長い間何にも勝る宝として大切に扱われてきたその歴史

3 いま、なぜ倉橋惣三かを問いなから、現在の課題を示唆している

4 「ノート」発掘の事情と整理の経過

5 下段の校注を含む「保育法」講義録本文

ところで、日本語は変化が激しいとは人も言い自分自身も思うことである。大正から昭和にかけての倉橋の講演の記録を学生と一緒に読むことがあるが、学生にとっては昔のことばのように時には読むことも難しい。学生にあらためて聞くと明治、大正の文学も「国語」の時間にその一節を読んだことが

6 倉橋理論の内容、「ノート」の全体を覆う編者による解説

7 主要文献の目録

この構成順に感想を一言

○一言ご挨拶

菊地ふじの

菊地先生がお茶の水の附属幼稚園ご在職の一期に、私は近くの東京学芸大の附属幼稚園につとめていた。新米の私は毎年お茶の水で開かれる講習会で学び、新米の気負いもあり、あの頃質問したことなど一度に思い出し赤面の至りであるが、角尾稔がIFELで同期ということから親しくしていただいた。当時しらなかっただけに大切にしておられた貴重なノートについての「一言ご挨拶」を感慨深くよみ、続いて講義録を大切によみすすめた。

○いまなぜ倉橋惣三か

津守 真

著者の「子ども学の始まり」は私の愛読書のひとつであるが、この講義録の「子どもに交わる生活感覚」とつながるものと感銘深く読んだ。またその他の、この講義録が世にでる際に、読者が心して読むべき要点についてのべている部分でも確かに「倉橋惣三が取り組んだ課題は、現代もなお、子どもを保育する実践の中で更に展開されるのを待っている」のであると私も思う。

○「保育法」講義録 本文

講義をノートしたものを更に清書されたそのご努力をしみじみ尊いものと思う。その上での感想である。

p. 7 「どのお授業もとても面白く感激、共感そのものとして、先生のお時間をとても楽しみにしていた。」 p. 241 「ノートはといえば板書された第一章〇〇とか、第二節〇〇とか：ばかりで」とは当時の倉橋の講義を直接聞いた人々がその時間

は、面白く、豊かな語らいを駆使した、和やかな話しぶりに魅せられ、笑いのうちに過ぎたと言う。そのような時間であったとよく聞くことであるだけに、言わば脇道の冗談や比喩が割愛されていることを惜しいと思う。またこの講義者の聞き取りに慣れた人の故からか筆記者が呑みこんでしまって、文字に記していない部分にわかり難いところがある。もうひと筆あれば、さらに講義する人の声が聞こえてくるものをと、惜しまれる。

例えば p. 207 「ボーズの扱い方で子どものイマジネーションを自由に運転する事ができる」等々の箇所である。

これからの課題（私の）について

この「ノート」の保育項目「製作（手技）・唱歌、及び、遊戯」の部分に、幼児の表現を考える基本と、指導の原理について多くの示唆をあたえられ

た。

なかでも〈芸術的誘導〉〈産業的誘導〉のことは耳慣れぬだけに新鮮で、自分の課題「保育法の講義はいかにしたらよいか？」を再び真剣に考える糸口となった。

書評を書くことを頼まれたのに、（本書の成り立ちにも関連するが）感想に終始してしまったことをお詫びして、筆をおく。

（川村短期大学）